圓顱錄資料

其一

特別
14
1919
760

176909

興味深き追懐

市島　謙吉氏（談）

▲無量の感慨

◎左様……自分が新潟新聞に關係したのは凡そ五六年間、昔三年の衆議院議員撰擧に敗れ、それから上京したのであるが、其以前であつたから何でも明治十七八年頃かと思はれる。其頃だとすると新潟新聞は三千號臺であつたらうが、其當時から今日まで、前後廿四五年に亘るので、新聞も老いたり、我も老いたりの感が殊に深い。そこで此場合に自分の在社時代を回顧すると、いふ可らざる感慨を覺えずには居られない。

▲入社の當時

先づ順序として入社した時の事から話すが自分は故吉田壽六君が洋行の爲めに新潟新聞の主筆を罷めた其後を襲だので、東京では尾崎行雄君が頻に自分を慫慂した。當時自分は鄉里では造りにくい感もあるし且つ無經驗でもあるから、入社することは好まないと言つて固辭して居た。併し今の前嶋男爵などからも矢釜しく言はれて、遂に新潟へ遣つて來るやうな事になつた。

◎處が自分は固より短才、到底人にた世話などをいふ柄ではない。以前から至つて無調法者であつた爲め、新潟に居る間も始終友人から忠告を受けたものだ。今は故人になつた濱政弘君などが、非常な豪酒で自分等とは酒飲み仲間であつたから、よく好意的にいろ〳〵注意して呉れた。然るに當時の新潟新聞社長は鈴木長藏君で、鈴木君は御存知の通りな極めて如才ない性格であるから、頗る官邊へ接近することを希望して居られた上に、前主筆吉田君が又た非常な才子肌であつたに引變へ、其後を承けた自分は甚だ無愛嬌者、勿論官邊へ出入するやうな事はやらうともしないそこで鈴木社長との折り合も妙で無く、其爲め任期一年にして危うく放逐されやうとした。

▲新聞社の大變革

◎自分は此時退任する積りで、飄然として出潟に遊んで居つた處、改革の氣運は意外の變化を示すに至つた。それは當時の主なる株主太間新作君、畠山嘉三君などい中蒲原組の人達が、元來新聞の主筆を屢變へるのは宜しくないと熱心に論じ出して鈴木社長に株主の更迭を談判した上、若し聽かれずんば株を讓り受ける覺悟で、結局新潟新聞社は鈴木君から本間君などの手に移つた。同時に今後は記者に相當の自由を與へる事、妄に他から干渉して其位地を動かすやうな事では不可ぬといふ說で、急に株主を更迭したのだといふ。

◎爾來は自分に編輯の全權を任せらるゝ事となり、計らず廿三年まで新潟新聞に筆を執つて居た譯だが、其後の繼承者が即ち坂口君である。同君は自分の親友だから、自分の一身には是れ迄幾多の變遷があつたに拘はらず、新潟新聞を喜んで讀むことは曾て一日も廢しはしない。

◎處が可笑しいのは山口君が例の流儀で會社が甚だアヤフヤだから

拂込の濟む迄は株主から擔保を取る。

株主も亦た大變連中だから投げ出し放しで數年間利益の配當などは固

14
1919
760

38- 9461

祝壹萬號
京都高津羽織
重生組委託賣賣
日本商店
染呉服太物卸商
小黑商店
三條町
祝壹萬號發刊
長岡市
石塚三郎
賣特許第六四三號
膳戸紙製造本元
御料理
北二洲樓
三條
小山亭
祝壹萬號發刊
特製
牛乳麵菓料理
許多に賞用せらる
熊倉商店
三條町一ノ木戸
白勢二郎商店
新潟市東堀通七番町

▲記憶すべき殖産協會

◎北越學館の起つてから少し後の事になるが當時の縣會議長は山口權三郎君で、此人は非常な勢力家であつた。隱然中越の頭梁といふ態度の人で、自分は屢々往來する機會が出來たを幸、いろ〳〵協議の末、實は山口君を擁して政社的の團体を設けたい考へであつたが、山口君は政治よりも殖産に熱心であつたのみならず、どちらかといへば漸進的の人であるから急激の計畫には中〳〵同意しそうにも見ねぬ。

◎そこで殖産の急要は勿論として、一面政治も併進して行かねば眞正の文明を見る事が出來ぬといふやうな事から說いて、先づ殖産協會といふものを起させた。其時の會員は中越を通じて全部の富豪家、其他の有力者が凡四十人、皆堂々たるもので、中に一人自分が新聞記者として加はつたのは寧ろ不思議な位であつた。此殖産協會こそは、新潟縣の歷史に頗る關係のあるもので、即ち實業の方面では今日の日本石油會社を產み政治方面では同好會といふが出來て今の新潟縣進步黨の基礎を成すに至つたのである。

▲其時代の石油業

◎殖産協會は初め二ヶ月に一度づゝ、三條・寺泊・長岡などゝ方々で開いたものだが、併し結局當時の自由黨に對し隱然一敵國を作すやうになつたのは事實である。其後此會が石油業に手を着けて日本石油といふ大會社をも產み出したが、當時越後の富豪家、殊に地主といふやうな人々は、石油業を以て山師のする事だと擯斥して居つた際に、卒先して此事業をやり出した山口君等は、慥に一歩進んだ考を有つて居たと言はねばなるまい。

◎慥が可笑しいのは山口君が例の流儀で會社が甚だアヤフヤだから拂込の濟む迄は株主から擔保を取る。株主も亦た大變連中だから投げ出し放しで數年間利益の配當などは固

よりしない。益金は凡て資本に入れたのだから此ほど確實な基礎はない譯。今から考へると變なものだが、此位にしたればこそ日本石油會社も成功したに違い無い。イヤ獨り日本石油のみならず、此殖産協會が眼前の利を計らずして即ち先づ模範的に事業の途を開いた爲め、少からず他を刺激して縣全体の石油業も遂に今日の盛況を見るに至つたものと思ふ。

▲改進黨漸く成る

◎今度は政治方面に移つて同好會の話になるが、自分は殖産協會が同好會を產んだものと確信して居る。殖産の方は山口君を說いて只今話したやうに成立したが其後追々時勢も進み、實業の事に聊か政治を加味するといふ位いでは不可なくなつたのみならず、自由黨の横暴が益々甚しく、それに市町村制も布かれたといふ次第で、周圍の事情が政治的になつて來たので、自分は愈々穩和的政治主義の結社を欲するの念が深くなつて、結局山口君を動かした。處が其時分縣下の豪家は自由黨の過激なのに恐れをなしてヒドク之に反對して居た際だから、大分自分等の主張に傾いて來た。そこで漸進主義を以て政治の改良を計る人々が相交的に集まるぐらいな生ぬるい標榜の下に、一つ團体を作らうとなつた處、殖産協會の連中が悉く加盟したので會の名を同好會と名けた。

◎此時の山口君はイヤ非常に熱心なもので下駄がけで各郡を遊說したが、中蒲原では前に話した新聞社變革事件以來自分との關係が深くなつて居た爲めに、數十人の入會者があり、更に遠く佐渡からも來り投じた依て頸城は別として全縣下に手を延ばすといふ譯になり、市嶋德次郎、佐藤伊左衛門兩君のやうな政治に關係のなかつた豪家をも入會させ、一ケ月間に大資產家百四五十人位を集めた。

◎尤も機運もあつたであらうが、山口君以下同志の者が、晝夜を分たず奔走した功果も夥しかつたと思ふ。偖愈々某月某日發會式も濟ましたのだが、之が即ち改進黨の團体で今の進步黨を形くる元祖であるから、新潟縣の政治史に必ず此同好會の名を逸してはならない。

◎尤も此以前に改進黨が全く無かつた譯ではない。併し頸城以外全縣に何十人といふ位い殆ど黨派などゝいふ實力も形式もなかつたので、同好會以後規律あり節制ある政黨として萌芽を發したのが事實だ。

◎其後大隈伯の條約改正當時、同好會は寺裏に會館を立てゝ（今は燒けた元の赤十字社看護婦養成所）其開館式を擧げた當日恰も伯の遭難で條約改正大頓挫の電報が來た。然るに反對新聞社が意地わるくもそれを號外にして水引をかけて、進物だといふので態々開館式場へ持たせてよこした。此方では忌々しいから突き返してやると、社員

繼出で其號外を市中へ撒き散らし各所で萬歲を唱へて盛んに示威運動をしたのであつたが、其日の口惜しかつた事は今以て忘れない。

▲新潟新聞と大同團結

◎それから一つ話したいのは、大同團結當時の事で、其頃中央政界の一角に、既設の政黨では規模甚だ小である、而も各黨其主張は必ずしも大差は無いのだから政界の先覺者としては宜しく襟懷を大にして、打して一丸としたいと論する聲が起つた。其結果故後藤伯を擁して愈々運動に着手したのであるが、東京の政友吉田熹六君や岡山兼吉君なども此に贊成で、後藤自ら越後へ遊說に出かけるから、自分にも左袒するやうにと勸めて來た。

◎當時縣下に於ける改進黨の形勢は、幾分政黨としての訓練も出來やうとして居る矢先で、自由黨に對しては勿論の事、大同團結にも頻りに一矢を放つて居た行懸りもあり、且つ又後藤伯の遣り方を見ると甚しく山師流であるらしい。そこで自分は依然として自由黨攻擊を續けたのである。

◎處へ後藤伯は還つて來たが、大石正己君が蹉いて來て、直に自分を尋ねた上、越後へ行たら市嶋さへ說き伏せればソレで充分だと聞いて來たから、何分よろしくといふ話だ。併し自分は承服しない。大石は又僑張りつけて置いて方々で飲んだ。其爲め自由黨は遂に彼れの顏を見なかつた位だが、此間に伯の演說の筋を聞くと果せるかな純然たる自由黨だ。

◎茲に於て自分の決心は更に固くなるばかりで、後藤伯來越當時の新潟新聞は全力を擧げて之に反對したのであるから、自分の身の上は當時甚だ危險なもので、宅へ歸るに態々道を迂回した程である。

◎處が當時新潟新聞と同主義な新潟日々新聞といふのがあつた。主筆の佐瀨猪一君は自分の友人ではあつたが、營業方面では兩新聞とも常に對抗して居たもので、どういふ譯か日々の方が著しく振はない。現に矢野文雄君などは遠く東京から佐瀨君に新潟新聞へ無條件で合同してはどうかと勸めて來た程の窮狀であつた。

底で佐瀨君は後藤伯遊說を機とし故に新潟新聞と營業方面の對抗上、全然異つた態度を執るのが利益と信じたものらしく大同團結の主旨を贊成した上に、元勳は優遇すべきものだといふやうな論說を書て、全社員——印刷植字の職工迄も引率して伯を出迎はせ、懇親會にも自ら進で出たといふ。

◎こうなると改進黨の二新聞が正反對の社說を出すのだから面白い。世間は熱心に注目して果は縣全体の論議の種となり、一轉して佐

瀬市嶋比較論、新潟、日々優劣論と分れた結果、市嶋最引は此際新潟新聞の購讀者になるといふ勢を呈したが、結局後藤伯は要領を得ずして去り、却つて改進黨は爾來益々其地盤を鞏固にすることが出來た。

◎イヤ意外に長くなつたから此位で止めやうが、若しも此話が一萬號の埋め草になつて、これが他日新潟縣史の一部分の參考ともなつたなら自分にとつては眞に望外の幸ひである。

早稲田大學圖書館

高田新聞

明治十六年四月一日 日曜日

官達公報

新潟縣錄事

社說

廣告

一瀬船

通船會社

天呑油
美人油

賣捌所 一二館支店

廣告

和洋布商會

英國文明史

英國憲法史論

出版書目

政法出版會社

欧羅巴革命史

政治汎論

新潟日日新聞廣告

新潟日日新聞社

日本防…記學會

一瀬船 休泊

熊田稻治

高田新聞社

御菓子…
發賣廣告

初號の高田新聞

茲に縮寫掲載せる高田新聞第壹號は明治拾六年四月一日に發刊せられたるものにて社長は市嶋謙吉氏、假編輯長設樂正吉氏、印刷長は竹村良貞氏にして社の所在は高田呉服町十一番地と銘打たれり今その記事の内容を左に略述せんに

△第一面　題字の外に記事二段ありて劈頭第一に諸達公報欄ありて太政官布達第十六號太政大臣三條實美、大藏卿公第十三號（大藏卿松方正義）を載せ次に新潟縣雜事欄ありて縣令永山盛輝の名に依つて發せられたる甲廿八號乙三十三號及び乙三十四號の布達を掲げその下段に至つて社說欄ありて發刊之詞六十條行を見る。

△第二面　には主として雜報を記載し御臨幸と題して聖上陛下の上野水産博覽會へ御臨幸遊はされしと、御祈議と題して三條太政大臣邸に於ける諸參議の會合のと、高等法院と題して福嶋事件囚徒の公判のと、信越鐵道會社と題して同社發起人室孝次郎嶋津忠眞氏等上京運動のと、正米取引所と題して直江津取引所設立計畫のと、築港と題して郷津港築港計畫のとを載せ外に長野縣會の記事ありて最後に弊社開業式と題し三月廿九日下田端太田樓に開催せる高田新聞社開業式の模樣を縷述し中頸城郡長渡邊健藏氏の祝詞を掲げたり

△第三面　更に三面に移れば孝なる哉と題して嶋嶋村船崎常吉の長男惣太郎（十三）が両親に事へて孝養怠りなきことを約一段に亘りて稱揚し、又眞なる哉と題して當町岡嶋町田所義博氏妻キミ女が老祖母及び母と病夫とに事へて孝養貞節を盡せることを同じく一段に亘りて記載せりその他骨堂建築　火災　船舶、汽船琴平丸等の普通雜報ありて外報欄に移れば魯國名士ゴルチャコフの易賞、埃及財政顧問の新設、佛國内閣議長ハリー氏の演題等あり而して末段に亦りて寄書欄を設け尾崎行雄氏の本紙發刊の祠詞を載す

△第四面　は全部廣告なるが、就中政書出版會社の墨國文明史、英國憲法史論、政治學論、歐羅巴革命史等の出版廣告が全面の約三分二を占領し得るは、當時の讀書界の一般傾向を想見されて面白く三館支店の天香油、美人油の廣告又頗る注目に値せり。

因に本紙に縮寫せる本紙第一號の原紙は直江津町片田九十八氏の所藏なり

早稲田大學圖書館

高田新聞の八千號を祝し高田の父老諸君に告ぐ

早稲田大學　市嶋謙吉

高田新聞が八千號に達するので私に何か書けと云ふ事を申送られた。新聞が八千號に達するには少くとも二十二三年の歳月を要する。今八千號に達した事に就て想ひ起せば、明治十七年頃自分が高田に行つて第一號を書いたのであつた。つい先達手の事の樣に自分は思つてゐが、今八千號と云ふ事を聞いて指折りかへて見れば　如何にも自分が第一號を書いた時は、既に廿二三年の昔に成つた事を考へるので、今昔の感に打たるゝ心持がする。つい此頃新潟新聞が、殆ど高田新聞と同じ月日に一萬號に達すると云ふ事で、是にも自分が嘗て關係のあつた緣故から何か書けと申越されたが、どちらも緣故あれど孰れかと云へば、高田の方が緣故が深いと言はなければならぬ。新潟の新聞は既に成立つた新聞に、途中から自分が行つた譯、高田の新聞に於ては其の創立の際に行つたのである。謂はゞ自分が產んだ樣な者である。然し自分が生んだのでは無い。人に成つて生れた者であるが、少くとも自分は其の生れた赤子を取上げた產婆と云ふ樣な者である。殊に生れてから未だ月日も立たない間、自分が手を牆けたと云ふ緣故もあり譯故、別に言ふ程の事も無いが、折角の御注文に應せぬ譯にも行かぬ樣に思ふ。

此の赤子の生れた頃の高田の天地と云ふものは、天候險惡で其上に惡疫流行とでも言ふべき、極めて發育に危險な場合であつて赤子に、ともすれば種々なる病氣、例へば胎毒とか驚風とか云ふ樣な症に時々惱むと云ふが如き自然の病氣に罹るのみで無く、外部から種々な病が襲ひ來つて、極めて危險な事であつた。處へ產婆が頗る無經驗で未だ產婆の業に從事してから日も立たない、未熟の者であつた爲めに、扱ひが頗る不完全であつたのみならず、ともすると產婆其自身の不注意から、風邪を引かせたり頭痛を病ませたり何かもるやうな事が有つて、如何にも慚愧に耐へない次第で有つたが、其が早や二十數年の年所を經て、無事に丁年以上に達したと聞いては、云ふに言はれぬ愉快の情に打たれる。是は畢竟小兒の體質が宜しかつたのであらう。夫に生みの父兄の撫育の届いた結果であつて、自分は產婆として深く其の父兄達に喜びを述べなければならぬ樣に思ふ。

全體高田は、自分が學窓を離れて仕事をした第一の地と言へる處で、平生自分が之を第二の故園と考へて居る處である。其頃未だ年少氣鋭の時であつて、第一番に自分の事業の筆おろしとして高田に來り、種々なる人と交つて、今日猶は愉快を感ずると云ふのは、高田の人々は中越若くは下越の人々に較ぶれば、全體に人智が進んで居るのみならず、氣風が如何にも快活で、其の年少氣鋭の境界に立つて居つた自分とは、顏る意氣の投合した事を感ずたので、今日でも想ひ起せば愉快に感ずる情がある。

第二の故園とも思ふ程の關係があるから、遠く離れて居つても自分一個は、決して高田の利害を度外に置いて居らぬ積りである即ち高田の喜ぶ時は自分も喜び、高田の悲しむ時は已も悲しむと云ふ譯で、遙に高田の人々と喜憂を共にした點に於ては、敢て人後に落ちぬ積りである。

高田が久しい間非常な沈滯な窮地に陷つて實は我輩も久しく憂ひた一人である、然るに一陽來復で、今日は師團を置かるゝと云ふ位置に迄成つて、始めて愁眉を開くに至つたに就ては、高田人が祝すると共に我も亦大に祝さなければならぬ。

先づ其の一二の事實を言へば、高田事件と云ふが如き、國事に關する紛糾の事件を生じて、其が爲めに多くの有力者に累を及ぼして或は家產を傾けしめ、或は多くの名家を失つたと云ふが如き事、若くは信越鐵道を私設に計劃せんとして、土地の有力家が資產を傾けて其事に奔走したこと、是等の事柄は孰れも効を奏せずして失敗に畢つた失敗に畢つたのみならず、信越鐵道の如きは他日私設として許されずして、官設として敗かるゝ事に成つたが、是等が一面から言へば、非常に交通の便利を開く事になつたに相違ないが、一面から見れば却つて高田地方の、衰微を招く原因ともなつた。斯の如き事柄が孰れも、高田地方を悲境の位置に導く原因となつたなれど、然しながら此の事柄を考へると、高田地方の人の性格を能くあらはして居る樣に思ふ。言換へれば高田人の計劃が如何にも規模大である又一身一家を犧牲に供して、公共に盡す事の精神も表はるゝのであつて、決して成敗の跡を以て、濫りに諸論を成す可きでないが、孰れの道にも斯樣な事が原因と成つて一時は高田が殆ど悲境の底に沈んだ、衰れな狀態に立至つたのであつて、高田新聞が起つたのも、恰も其の風波の荒い高田事件が起り、信越鐵道の計劃された時であつたのである。

兎に角非常な悲運に陷いつたのが、今日は一轉して國防の要地として撰定せられ、未來繁榮を期し得る樣な場合に進んだと云のは、高田の爲めには如何にも幸の事であつて、是を以て大に息を吹返す事が出來るであらう。隨分高田が長い間ひどい苦しみを仕たが、然し今後の大任を思へば、無論此位な艱難苦勞を經なければならぬ筈であつて、先さに引ける孟子の語は、即ち斯樣な場合に當て嘆る可きものと思ふ。

「孟子の語に「天將レ降二大任於二是人一也。必先苦二其心志一勞二其筋骨一餓二其體膚一空二乏其身一行拂二亂其所一レ爲所以動心忍性曾益其所一レ不レ能」とあるが、高田人は全く其れであると思ふ。高田人の久しく沈滯の位置に陷れられ、悲境に立つたと云ふ事は、取りも直さず今日師團を置くと云ふ大任を與ふるの試驗として、一旦斯かる悲境に陷れたものと解釋せねばならぬ樣に思ふ。

成程未來の繁榮は、期し得らるゝと云ふ場合に成つて來たに相違ないが、高田人の任務は實に大なる事を忘れてはならぬ。昔越後謙信は天下に覇を唱へんと畢生の大事業として、上國に通路を得ん事を希ひ、一方は加、能、越、この方面を開いて上國に達せん事を力め、一方は信濃を經て脈絡を通

早稲田大學圖書館

せん事を圖つた。而して加、能、越の方面に就ては漸く通路を得たが、一方の信濃を經ての氣脈に就ては、常に信玄の支ふる處となつて、屢々川中嶋に大戰を開き、一世の力を之に集中したけれども、遂に其の目的を達せずして地下に入つた。諸君の住處近く居城を構へた彼が如き豪傑霜臺公と雖も、遂に達し得なかつた目的を、君は僅に二十年の苦勞に依つて、今達し得たのである。其は此度置かれた師團は、久しく信越の引張凧になつて呑つて、其の勃れに決するかと云ふ事は、取りも直さず信越南州の勝敗の分る〻樞と謂つても宜敷いのである。諸君の手に落ちたと云ふのは、恰も川中嶋大戰の勝利が、越後に歸したと云ふと同じ事である。即ち何百年來の宿題が、諸君の代に至つて決したと云ふ事が出來るので、諸君の名譽も大であるが、諸君の責任も亦大と云はなければならぬ。

若し夫れ、加、能、越の方面に對する通路は、近く豫定されて居る敦賀より直江津迄の鐵道が貫通するに至れば、其れは恰も謙信の開いた路が一層文明的に開げるのであつて、其の事は既に眼前にあるとであるから、其道は既に開けて居ると云ふとも出來る譯であつて、深く意に介するに足らぬ。乃で斯樣な位置に立ちたる高田人は、深く其の責任の大なるを思ふて、謙信の如き大なる事業を立つるとに意を致さなければならぬ。前にも云ふた如く、高田人の既往の事業は如何にも規模が雄大で、又公共的の性質を帶びて如何にも立派であるが、久しく窮地に陷つた結果で意氣銷沈して、折角能い立場に成つても只安逸を貪ると云ふ樣なとであつては、謙信は地下で何と之を評するであらうか。兎角繁榮の土地に成ると其の弊の隨伴し來るものである。譬へば廣嶋の如き、日清目露の大戰で、彼處が始終緊要の地になつて、非常な繁榮を來したには相違ないが、今日になつて見れば たゞ〻奢侈の風を增して、元の遊惰の風に一層の害を加へたに止つたと云ふ事を考へて見ると、高田人は大に前途に警戒を要することであらうと思ふ。

二十數年來非常な不幸に陷り、總に一陽來復の時に臨んで、其の機會と位置とを善用せずして、却つて其の弊を受くると云ふが如くであつたならば、高田人の未來の不幸は、重に既往より大なるものが有るであらうと云ふ事を怖れる。

自分は既に高田を以て第二の故園と思ひ、自分が取上げた其赤子が、八千號と云ふ成長の域に達したのを祝すると共に、今昔の感に耐えず、茲に老婆心を逃べて高田人士並びに三頸城の父老諸君に訴ふると云ふ。

附白　聊か祝意を表するため友人吉田半迂氏に囑して特に刻せしめたる「大雅八千」の印一顆を呈上する、印語は莊子に所謂る上古有大椿者以八千歲爲春以八千歲爲秋より取たことは申す迄も無い、幸に貴紙の一隅に御採用を得は本懷に存ずる、

○懷舊談補遺（一）

市島謙吉氏（談）

此頃の貴社の一萬號に種々なる懷舊談が載つて居つて關係のある自分に取つては頗る興味を感じた自分も卿か在社中の事歷をお話をしたが自分の在社の間は最も長く且つ色々の事件の起つた際であつたから未だ幾らか言ふ可き事も殘つて居るやうな氣がして、色々考へても見たが餘り面白い事實は思ひ當らない、然し最も好い機會だから二三漏れた事を御話して置かうと思ふ。

○此頃の懷舊談のうちに新潟新聞の創立頃の話も載つて居つたが、夫に就て想ひ出した事が一つある。其は外でも無いが自分は極めて少年の頃から新潟新聞に筆を取つたと云ふ關係がある。其は恐らく何人も知らない事であらうから、此の機會に少しく言ふて置かう。新潟新聞の創立の頃は新潟學校と云ふ英學校が設立せられた頃であつた事がある。其際に今は實業家として知られて居る梅浦精一氏が一等飜譯官と云ふ職務を以て、新潟縣廳に居つた。其傍ら學校へ教へに來て殆ど教頭と云ふ位置に立つて、句讀師（學生中の最も優秀なる者を選拔して他の下級の學生を教授せしめた其の人を句讀師と云ふて居つた）を重に教授し、傍ら飜譯科を設けて外國の新聞などを飜譯させ、其を梅浦氏が直して居つた。當時外國新聞を飜譯する位の學生は極めて少數であつて、所謂句讀師などが其をやつたのである。自分は年輩は若かつたが選拔せられて他の先輩と此の飜譯をすることになつて、何でも一年半許り大分勉强して見たことがあるが、其の飜譯の梅浦氏の斧正を經たものが何處へ行くかと云へば其は皆當時の新潟新聞に寄せたもので新聞では歡迎して必ず紙上にそを載せたものである。無論筆者の名などを一々書く可きものでは無いので、今日となつては新聞社自身が譯したり東京の新聞の切拔でも仕たかの如くに考へるであらうが、其は全く學校より寄せたもので、自分の筆に成つたものも隨分かはつて居る筈だ。當時自分は少年時代であつて自分の筆に成つた

ものが新聞に載るのを見てひどく榮譽として之を悅んだので、自分は新潟新聞に古くより緣故があるとも言へるのである。

◎先日御話を仕た懷舊談のうちに、一つ緊要の事を洩らした。其は外ではないが市町村制の發布、續いて帝國憲法の發布に就き自分が活動した事柄其に取りも直さず新潟新聞の活動と見て可きものであるから、此處に補ふの必要があると思ふ。市町村制の解釋なんどは今日こそ誰でも知つて居るが其當時は中々解らないもので、其が直ちに如何な小村落にも實施されて、村の人々が直ちに運用の衝に當らなければならぬので大分各方面に於て其の講義を聞きたいと云ふ希望が起つた。たしか龜田に其前から親つて居つた龜田協會が一番最初であるやうに記憶するが、自分が前から政治經濟などの講義をやつて居つた關係から、市町村制の講義、自治制の講演をやつてくれろと云ふ注文が起つて、其を毎月やつた事があるが其が何處にも其の必要があると云ふ處から、彼處からも此處からもと云ふやうに各處に於て聞くといふ催しが起つて、遂には二三郡に跨つて最も烈しかつた時は十三四會をかけ持で巡回を遣つた事もある。其の會員は土地の重なる人々であつたが自分の不典なる講義を熱心に聞かれたのは今でも感服して居る。であるが、是は單に講義の會に過ぎないので別に意味のあつた譯ではないが、然し間接の影響は實に大なるものであつて、其の講義の會に列した人は自然自分の味方となり其が新潟聞の愛讀者にもなり同好會の會員ともなり、遂には進んで改進黨員ともなつたので、此の運動が間接に大なる影響があると見て取つたる反對黨は、吾輩の爲すに學んで其の當時新潟に來て居つた城泉太郎と云ふ人を講師として追々各方面に同じ樣な巡回講義を聞始し以て黨勢扶植の手段となすに至つた遂には双方稍々競爭の姿を呈して愈々各郡に亘つて同じ性質の會が勃興し自分は全く社の編輯局を明けて毎日奔走すると云ふ狀態であつた、新潟縣に於ける進步黨の今日あるは是等も與つて力ある譯で、新潟新聞社が營業の利害を度外に置き自分をして斯かる活動を自由になすことを許したのは、進步黨側から深く同社に感謝の意を致さなければならぬ事と思ふ。（未完）

史料

報知新聞史

如雨水山人記

◉實に停世の感がするなあ、二十萬の借金を背負はされて、うん〳〵と呻つてたものがさ、何うだい今あの大仕掛、自分のとこばかりなら兎も角、一向俗受けのしさうもない、毎日新聞の經營までやつて、議論と實際の兩方面から、世の中を挾み打せうといふ見幕がねえ、これがあの貧乏世帶から築き上げられたのとは、何うしても思へんでねい。おれ此間途中で、夕刊を配ばつてるのに出會したもんだから、これあ何の位讀まれてるんかと思つて、配つてくのを數へてると驚いたよ、僅か一丁ばかりに十七八枚もあるんだから。

當時は一記者で、今は社主の箕浦も同席で、三木が此間乃公へ斯んなことをいつた、報知も全然昔とは違ふ、君も大分舊くなつた、まあうちへ來て、一時間に幾十萬と上げる輪轉機の揃つたとこでも見給へ、と吹かれたが、仕方がない吹かして置くさ。三木かい、彼の貧乏世帶から盛り上げた當の御主人さ會計から喰付き通して、終に彼れまでに漕ぎ上げたんだからなあ、中々遣り手さ。

◉生ひ立ちの順序？、うむ、昔は慶應義塾出の先輩の一手で經營されたものが、今は大隈伯に屬いてる、これと同心異體の毎日と來ては、全く早稲田の手でやるやうになつたんだから、其變遷が一寸面白いね。無論明治の初年の頃さ、日々に少しおくれて起つて、主もに經營の方に當つたのは、乙部鼎といふ男、主筆は藏田茂吉であつた。成程、後には矢野も居ればこ箕浦も居る、犬養、尾崎の剛のものも入つて來る、

更に下つては加藤政之助などもやつて來たが、藤田は最先輩で、筆も中々立つたもんだ、政論家としてばかしぢやない、文學的色彩もタップリで、其著述は、又文學上十分の價値がある。尾崎の田舍廻りかあれあ報知へ入る前さ、十九の年齢であつたらう、未だ肩上げのよく〳〵の青書生でさ、地方では最古參、最有力と云はれた新潟新聞で、隨分生意氣な議論を遣つたもんさ、これから先も恐らく、こんな年の少かい主筆の出つこはあるまい。先生、それから柄でもない、何處かの權小書記官とかになつて歸つて來たのさ、犬養もさうだ、これあ後になつてからさ、田舍でも新潟のやうな大新聞なら、一寸頭もひねつては見るが、高が奥州の奥のボロ新聞に流れ込むに至つては奇拔だらふ、流石犬養がやりさうなこつたよ、ナニ君、生活のためといふよりは、改進黨の遊説に出かけたやうなものさ。あの頃は東北でも、秋田が最も政論の勃興したところと見えるよ。

其頃日々には福地櫻痴威張つたもんぢや、滿都の書生、悉く彼れを理想として進んだものさ、大學も慶應も、彼れの前には頭は上らん、實際無官の宰相であつたなあ。朝野新聞には成島柳北、末廣重恭などが居つた、が、藤田は社内ばかりではなし、何處へ出しても天晴れ驍將の器であつた。ふむ、面白い話があるよ、いくらエらくても今から見ると未だ兒供さなあ、當年の面影があり〳〵と見えて來るよ。それはかあ、滑稽な話さ、まあ焦き給ふな、藤田に朝吹英二に、莊田平五郎に尾崎なども、入つて居つたと思ふ、其他未だあるが、今はよう記憶には殘つて居らん、これ等の面々が何ふも金時計を欲しくて耐まらんので、今でも田舍へ行けあ、さうぢやが、其時分では東京でも、金時計といふと、皆が寄つて集かつて一寸拜見とやつたもでなァ、それで君結構、皆で無盡を拵へて籤抽きして當つたものが先に買へることになつた、然し藤田だけは先取權を得たのさ

堂々たる郵便報知新聞―報知新聞は先頃迄は郵便といふ二字を頭においたもんでなァ――の主筆である事の擔當で隨分能く書いたもんだ、中には數十日にも亘る長いものも書いてなあ、彼の浮城物語もそれ

といふので、一目置いてるもんだから、マァ君だけは籤に入らんでも先に買い給へといふ譯で、先生早速キラめかしてやつて來た。これを見た朝吹が、羨ましくて耐まらん譯さ、いゝかい、それでなァ恨み半分に藤田に、「君ゐ何ふも幸福者だ、時計祝として一ぱい饗り給へ」と出たので、「よし饗らふ、來い」牛肉屋へ連れ立つて出かけた。喰つて飲みながら、頻りと時計をいづくつてたが、ふとした途端に朝吹が、牛鍋の緣へ落つることとしたといふだ、慌はてゝ取り上げたが駄目さ、金側が凹んじまつたぢやないか、酔ふどころか君、二人りが眞蒼になつて歸つたさうぢやが、まあこんなものさ、一流でも特流でも、未だ〳〵兒供氣の取れない血氣ばかりでなあ。

◉社内の豪傑連の毛色かい、藤田は何處迄も堂々たるものさ、尾崎も始終能く戰つたよ、矢野は外國記事の擔當で隨分能く書いたもんだ、中には數十日にも亘る長いものも書いてなあ、彼の浮城物語もそれさ、洛陽の紙價を高からしめたもんだ、犬養と來ては根つから横着者で容易に筆を取らぬ、だが、筆を採つたら人間の肺腑を抉ぐる一頭拔いた皮肉の名文さ、昔からの特色だよ、此他に栗本鋤雲といふ爺さんがあつたつけ、爺さん中々捌けたもんで、いろんなことを書く、幕末の片つ苦るしい腐れ儒者とは違ふところがあつてなあ、これが又中々讀者を呼んだもんで。いや報知ばかりぢやない、鬼神のやうな大將軍側には、女形が一人づゝ座つたもんぢや。そら、朝野には雪中梅の末廣重恭に成島柳北、日々には福地櫻痴に岸田吟香さ、後にこそ抹香臭い達磨樣に扮裝たりして得意がつたが、其頃は中々艶氣たつぷりの男でなあ、隨分うまいことを書いて兒女の血を沸かしたもんだよ。前にもいつたが、其頃福地の勢力と來たら素敵なもんで、天下の視線は悉く彼に集つてる書生連は、福地に會ふたことを非常の名譽がつたもんで、時の大學生山田（一郎）市島、高田、圓山、山田喜之助の面々が、政論の自由を平等に要求して、彼れと日々社の樓上に會ふたときなどは、書生連の得意と來ては大したものさ、末松があんな仕合せものになつたのも、福地の目鏡に嵌まつたからのことなんだ。うむあの眉毛の綴れた子爵さ、あれは青萍といつてなあ、日々に筆を執つて居つたが、福地が根つから惚れ込んでしまう、頓がて洋行する、歸つて伊藤の聟になつたといふ譯さ。其福地が何うだつたい、晩年がさ、國會議員にはなりはなつたが、當時は兒供扱したものゝ下風に立つて、屢々芻米にも乏しうして此世を去つた、英雄の末路は永へに悲慘でなあ。

◉此處で當時の新聞の色分を少し話しておかう、まあ年輩から見ても、位置からいつても、日々、報知、毎日、朝野、曙といふ順だらうなあ、讀賣なんかあ君、高田が入るやうになつてから、少し氣品も高くなり、天下に認められたが其前と來ては何うして〳〵日々は政府黨さ、隨分政府からのお手當も厚かつたらう、他の方では又も停止、又も停止とやられるので、財政は火の車の時にも、太平樂でやつてたもんだ、其他は大抵政府反對の方であつたが、福地丈けに日々はエラク老成ぶつたもんでなあ、孺子何事をか談るといふ體でやつて來たもんだ、毎日と來ては、根つから田舍辯護士さ、あれも法律これも法律、文章も法律屋句調で、議論も法律論。其傍には朝野新聞は頗る悠暢の體で、全面四號活字なんどを使かつて、文學趣味たつぷりの長袖新聞だね、當座即妙の新趣談だがウマィだらう、それから見ると報知の方は昔から見識が高い、毎日の法律と朝野の悠暢の間を通らうとしたもんだからなあ、一體君、毎日も報知も始終政府攻擊の地位に立つてなあ、後には何つちも大隈伯の改進黨の旗を持つたものだが、報知

早稲田大學圖書館

派には議政會、毎日方には嚶鳴會といふ組があつて、これも小軋轢が絶えんかつたよ。

◉政論は當時の生命さ、現今のやうに三面で新聞を買ふやうな目からは一寸見當がつかんね、報知なんと來ては、揃ひも揃つた腕白がさ、もう立憲大臣にでもなつたつもりで、毎日〳〵獅子吼してるんだからなあ、何年だつたか判然記憶にないが、主權論について議論が始まつてなあ、無論日々は主權在君論だつたが、毎日と報知は筆を揃へて毎日〳〵これに衝つかゝる。毎日かい、さう〳〵沼間守一に、島田であつたらふ、沼間の方は先輩さ、然し何うも報知の方の議論が上は手であつたやうだよ。此喧嘩は新聞ばかりの喧嘩でなくて、若い連中が集まると直ぐ此議論さ、大學の連中も、また一派の主權を考へ出して天下に公表しやうとする、慶應あたりにも無論始まつてる。新聞記者の品等も、其議論で定まる、だから中々頑張つたもんだが、今から見ると、まあ西洋の受賣なんで、洋本を澤山讀んだものが結局勝つといふやうな譯合さねえ。

◉發行停止か、それや覺悟の前だ、一ケ月に一度や二度は屹度やられたものと思つて、算盤の玉へちやんと入れてかゝつたもんだ、一度やられると隨分迷惑をするんで、會計の方からは種々注文も來るが、彼の豪傑連だもの、何して君聞くもんか、借金は日增に募る、財政は愈攪亂する、それでも尾崎などの呑氣さ加減と來たら話にならん、もう丸で立憲大臣になつて仕舞つてるんで、大臣といふものは、金なんて眼中におくもんか、小ぼけな考ぢやいかんと、いつた體でなあ、黒縮緬の羽織に仙臺平でさ、宿へ行くと金屏風なんかを廻はしおいて、借金取を蚊の聲程にも思はんから、中々おもしろいぢやないか、貳拾萬圓の社債は此時の事さ。先生終々保安條例を喰はされて西洋へ逃げて行つたのはせめてもの仕合だつたらふ。

◉藤田は死んで、犬養去り、尾崎出で、箕浦は新潟に稼に出た後と思ふが、矢野は洋行して、外國の新聞の狀況などを詳はしく調べて來て、直ぐ其理想を報知に行なつたんだ。ぢやから其後の新聞は。まるで矢野型になつて、前のとはころつと變つたものとなつたんだ、うむ、隨分長いこつちやから、後先になつたり、覺え違いもあるこつたらう、おまけに突差の間の話でなあ。其後も幾變遷もして、今ぢや尾崎のものでも犬養のものでも矢野のものでもなくて、武富の手に入つてるが、經營者は、矢張り當時から續いて來た先刻の三木さ、彼男あ中々遣り手だなあ、貳拾萬圓の借金をすつぱり返して、アノ通りの大仕掛でやつてるからなあ。此間もこんなことをいつて自慢してたつけ、「新聞もかうまでなれあ、も一度犬養さんや、尾崎さんに來て貰つても大丈夫ですねい、とさ。犬養や、尾崎が居ると借金が殘る、彼男等が居らんと儲かつて行くと面白いぢやないか。

◉兎角あれまでやつてのけたのが中々うまいて、それもさあ、時潮に媚びるとか無法に俗受ばかり考へて下品なものだとかなれば別問題だが、品を保つて自分の主義を主張し乍らあの通りの繁昌と來ては、まあ一寸想像のつかん大成効といつてもよからうてこれも賣捌の機關が整つてるからでもあらう、中々よく行き届いてる、丸で唯の白紙でも賣れねばならんやうに機關が備つてる。兎に角新聞界のために悅ばしいことぢや。

すゞしやくさむらことに立ちよれば
あつさぞまさるとこなつの花　貫之

夏の月曾の白衣を照しけり　三間堂

梟鳴くほとゝぎす鳴く蛙鳴く　山梔子

以下全て

白　紙